

カントの先天總合判斷の最高原則について（承前）

大西友太

三

前節に於て私はカントの『先驗分析論』に於ける原則は絶對自我の自己否定的方面に於て見らるべき客觀肯定の原則である點について論じ、而してその終りの方にあたつてこの原則に於て見らるべき客觀的實在の内在的合理性を思惟の契機とする絶對自我の絶對思惟及びその原則が改めて本節の問題とならねばならぬことを論じた。カントは總合命題の總合といふ點に於て比量性の先驗論理の範疇の演繹としての體系的認識の總合的統一の先驗的理念に對して思辨論理の範疇の辨證法的演繹の思想を採用せねばならぬ論理的必然にある以上は、一度は必らず絶對自我の自己否定に於て客觀的實在を承認しその内在的合理性を肯定せねばならぬ立場にある。この點はカントの演繹論の體系に於て最も注意すべきところである。自己否定においてはカントの演繹論は一應はヘルバルトの實在論と一致せねばならぬ必然にあるといつてよい。カントからいへばヘルバルトの實在論は本來的には自我の自己否定に於て見らるべき客觀的實在の内在的合理論であり、エクジステンツとしての

物自體論であるといへる。ヴェンデルバントはヘルバルトの實在論を以て批判的形而上學と呼んで居る。若しカントが分析的先驗論理の範疇及びその演繹に終始するものとするならばその學説はこれと反對に必然的に新カント派に於けるが如くに發展するの外ないであらうけれども、この論理的分析命題から總合命題の思辨的論理の範疇及びその辨證法的演繹に進むのを以てその哲學の最も根本的な特徴とせねばならぬのであるから、その限り必然的にその演繹に於て一度はヘルバルトの形而上學に於けるが如く内在的合理性の實在論を承認せねばならぬ論理的必然にあるといへる。カントの認識論に於ては實際即自的實在の物自體的存在が思惟の契機として思惟の眞理性を客觀的に保證する點を除いては、判斷の確實性又は思惟の明證性といふことはその意味をなさぬ。カントがその先驗論理に於て物自體を以て先驗的對象とする限りに於て全く認識すべからざるものであるに拘らず、何等かの方法によつてこれを認識せんとする努力をつくすことを吝まぬのは偶然でない。こゝにカントはその先驗論理から思辨論理の辨證法に進んで問題の解決をなさねばならぬ必然を解明する必要があるのである。カントは『先驗的理念について』に於て實踐的理念は姑らく措いて論せぬ、理性を思辨的使用に於て觀察し、否、それよりもなほ狭き意味の先驗的使用に於て觀察するといつてその理念演繹論の特徴を論じて居るが、總合命題の根據に於て思辨論理の範疇を採用せねばならぬ必然にある以上は、カントは直覺性の思辨論理に於て物自體の認識問題に關して新らしき解

釋を下さねばならぬ必要を有するのである。

既に述べた如く意味は原則によつては與へられざる絶對的起原の非合理性のものであり、無媒介の絶對であつて、この意味として與へられる限りに於ては物自體は全く非合理性の絶對であるから、これを合理性に於て見、隨つてその總合的規定を考へるといふ如きことは全く不可能であるけれども、比量性を契機とする直覺性の思辨論理に於てはこのことは辨證法的演繹に於て直接承認されねばならぬ。物自體は存在それ自體として自己固有の方法によつて存在し自己固有の述語を自己自身から發展する主體である。それだけにこのイデアとしての物自體は判斷を超越せるものでありながら自己自身の中に判斷を成立せしむるものとして自己自身の述語を自己の中から發展し、その主語的なるものを全く述語的なるものに現はにして終ふ内在的合理性をもたねばならぬ。イデアとしての物自體は絶對の非合理性なるが故にその直覺の時間及びこれに内在する空間の規定によつて合理的存在のエクジステンツとなり、永遠に於ては時間の代りに空間が支配し、而してこの空間に於て一切の實在が理性的に相互關係をもち得るやうにそれ自體獨立の存在として一切の實在的關係を内在的合理性に於てもち得るのである。只カントのヘルバルトと異なるところはその辨證法的な點に於てかゝる客觀的實在は元來自我の自己否定である限り自我はこの否定の否定によつて自己の絶對肯定の自覺に歸り、自己自身の非合理性を自覺すると共に、この客觀的實在の合理性を自己

のものとして自己の中に包含し、自己の非合理性と相即し聯關する點に於て自己の經驗とその反省とを無限に開拓するにある。カントは客觀的實在の契機によつて自我の自覺に歸り、その内在的合理性を思惟の契機とする理性の思惟が絶對自我その物の自己媒介による絶對的思惟である點で客觀的實在論に對して絶對觀念論の立場を明らかにする必要を有することである。ヘルバルトは觀念論を非難するけれどもその實在論は觀念論に進展せねばならぬのであつて、カントの眞の總合の範疇の辨證法的演繹に於てはその自己否定に於て見らるべきヘルバルトの如き實在論から自己を回復する自我の自己肯定は實在の内在的合理性を契機とする自我自身の自己媒介による自我の絶對自覺である點に於て深く絶對觀念論の絶對自我の領域を開拓するのである。

勿論カントは比量的には根源的統一の絶對自我に於ける先驗的述語を對象とする範疇を見ると共にこの範疇を先驗論理的に演繹するのであるけれども、これは先驗論理の總合的統一の先驗的理念の聯關的認識に於ていふことであるに過ぎぬのであつて、この演繹が『經驗の類推』に於て見る如き客觀的實在の内在的合理性を明らかにするのみならず、なほ『經驗的思惟一般の公準』に於て見るやうに客觀的實在の物自體的事物の内在的合理論であるについては、その認識は直覺的認識として個別的存在の方法によつて課題を解決せねばならぬのであつて、必然的に比量的認識に於て規定されたるものを規定されない理念の下に従屬せしめる方法を棄て、直覺的認識の理念をとらねばなら

ぬ。このことはカントが事實上總合命題の總合に於て比量性の先驗論理から直覺性の思辨論理に進んで居る以上は當然承認せねばならぬところであつて、カントの演繹論の特徴は一般に先驗的理念の統制的演繹にあるとせられて居るけれども、この演繹の理念の比量性を直覺性に轉ずる點に於て、その先驗論理の演繹を全く體系の一變せる思辨論理の辨證法的演繹とする點に於て客觀的實在の個物を肯定するにある。カントの本來からいふときは既に述べた如く質料でもなければ範疇でもなくこの兩者の統一せる意味が問題でなければならぬのであつて、この意味が無から生ずる絶對起原の有であるといふ點では全く「心」の直覺に基くものとして非合理性の絶對であるといふの外ないのであるけれども、その非合理性の絶對であるといはれるものが思辨論理の範疇として辨證法的に合理性の客觀的實在を肯定せねばならぬのみでなく、なほこの合理性は非合理性の自己否定としてその自己回復に歸らねばならぬ内面的必然を有するものなる點に於て非合理性の絶對の自覺でなければならぬのである。非合理性の絶對は内在的合理性の客觀的實在の事物を以て自己の自覺の内觀 *Einblick* を客觀的に明らかにせるものとするのである。思辨論理の範疇から見るときはカントに於ても客觀は絶對自我の自己否定に於て肯定さるべき實在なのであつて、辨證法的に既にその中に絶對自我その物が固有の充實性において明晰なる形態の客觀的真理實在を構成して自己自身の内觀を表現すべき理由の内在を有するものであると見ねばならぬ。随つてその限りに於ては絶對自我はこ

の客觀的實在の世界を自己自身の中に有し自己自身からこれを發展するものでなければならぬと共に、これを自己自身の自覺に於て發展するものでなければならぬ。即ち自己自身の媒介によつて自己を絶對自覺に向上せしむる契機でなければならぬ。それだけにカントの哲學に於てはこの絶對自覺に向上せしめられたる絶對自我が客觀的獨立の物自體的實在を辨證法的自覺に於てもつ點を明らかにすることが最も重要な根本問題でなければならぬ。

既に述べた如く絶對自我は自己否定に於て客觀的實在を肯定するものである以上その自己否定の客觀を自己の中に有するものでなければならぬから絶對自我は絶對有でなければならぬといへる。併し又既に述べたる如く意味としての根本的實在に絶對的起原を與へ得るものである以上はそれ自身絶對無でなければならぬ。明らかに矛盾であるけれども絶對無の自己否定に於て客觀的實在を肯定した上で、この肯定を否定して自己自身を回復するところに自己の無を自覺すると共に又絶對有の客觀を含み、随つて又自己の絶對有を自覺し、この無有の二つを結合するのである。絶對有の客觀的實在を絶對的起原に於て承認するものであるから絶對自我は絶對無でなければならぬとか、又はこの客觀を肯定するのであるから自己否定的要素としてこれを有して居る絶對有でなければならぬとかいふのみでは客觀に對する限定を知らない無限の統一の原理であるといふだけのことであつて、それが何故に客觀的實在に發展せねばならぬかの理由に至つては全く知る由もなく、イデアが

事物の基礎付けをなすべき理由は判らぬ。併しこれはもと／＼辨證法的なるべき自我を只即自的に眺め、單なる超越性の範疇に於て觀察するに止まるのであるから全く當然の結果といはねばならぬのである。超越性の認識である限り只規定されたるものを知り得るのみであつて、規定されない自我は永遠の理念として絶對といふより外仕方がない。吾々は只この即自性を對自性に轉廻し、隨つてその超越的自我を思辨哲學の辨證法的自覺に轉廻する場合に於てのみ理解し得る問題であること知らねばならぬのである。この場合に於ては客觀的實在を思惟の契機とする絶對自我はその自己否定に於ける客觀を否定して自己の絶對的肯定に歸り、隨つてその限りに於て自我の自覺に於て既に述べたる如く無有の矛盾せる性格を統一するものであることを明らかにすると共に、客觀的實在の内在的合理性を思惟の契機として自己の自覺的思惟に歸るといふ點に於て自己自身の非合理性を自覺する點で客觀的實在の合理性を含み、非合理性と合理性とを相即聯關せしむるのであるから、超越的理念として明らかに得ない自我それ自體の論理的性格を明らかにする。内面的必然的に無は有に有は無に、又非合理性は合理性に合理性は非合理性に理知的運動を起さざるを得ぬことを知るのである。

「心」それ自體に於てもこの矛盾を有するけれども只イデアとしてゝある。吾々はその辨證法的發展により一度は自己を否定することによつて「心」がそれ自身を自覺すると共に客觀的實在を統一

し、主觀と客觀即ち思惟と實在との統一の根本的事實が一層深く且つ強く反省されるのである。辨證法的範疇である限り既に述べた如く「心」としての自我はその自己矛盾の存在原理を有し、一方に於て「心」それ自體の反省を無限定に深くすると共に、その非合理性の自己否定に於て客觀的實在の合理性を肯定せねばならぬのみでなく、この肯定が本來では自己否定である點に於て更らにこの否定を否定して自己の絶對肯定に歸り、自己自身の自覺に於て客觀的實在を含み、その合理性を以て自己自身の非合理性と相即し聯關する。「心」が辨證法的自覺に於てその自己矛盾を相即聯關するものが精神である。由來 Seele と Geist との關係についてはその解釋が哲學に於てもキリスト教に於ても必らずしも同一ではない。精神を以て單なる理知として「心」の反對者であるかのやうに解釋するものもある。併しこれは分析的先驗論理の影響に災せられるからであつて、單なる抽象的結果を見るに止まるものたるを免れぬ。「心」はもと先驗論理のイデアではなく思辨論理のイデアでなければならぬのであるから、論理的必然的にその辨證法的發展に於て一度はロゴスの存在となり內在的合理性の客觀的實在の肯定とならねばならぬと共に、この實在の肯定に於て見る「心」それ自身の自己否定の否定即ち自己肯定に於て自覺に歸り、イデアとしての單なる自覺 *weis sich* から客觀的實在の內在的總合者としての自己の自覺 *weis sich als sich* に歸れる全體者を精神といはねばならぬ。この精神が具體的に「私は私である」なる命題によつて示される自我であつて、その思辨的な

る限り勿論主觀と客觀との相即が見られ、非合理性と合理性との矛盾の結合が見られねばならぬ。随つて私の解釋では精神はヘーゲルに於ての如く絶對その物であり、それ自體存在しそれ自體から世界を發展すると共にそれ自體の中にこれを有せるものである。それ自身世界に於て表現する自覺者であらねばならぬ。その直接的自己否定に於ては最早單なる客觀でもなく主觀でもなくこの兩者の統一せられたる根源的事實が内在的合理性に於て客觀的に實在するのみである。眞のロゴスはここに見られる。随つてこの自己否定の否定即ち精神それ自體の自己肯定に於ける絶對自覺に於てはロゴスの合理性が精神それ自體の非合理性と相即せられて絶對的に實在せねばならぬ。精神の絶對自覺に於てはロゴスをも内に含む自己としての自己の自覺がある。神がこれである。ロゴスには精神をもいはゞ第一實體として自己否定的に發展し得べき神が内在せねばならぬ。プロチンの一者の如きものが内在せねばならぬ。プロチンは思惟と實在との理知的本質をなすべきヌース即ち精神を以て第一實體として一者の所産と見たが、カントも神の自己内直觀に於て精神を見ねばならぬのであつて、總合命題の總合に於て一切問題の解決を期する限りカントはその思辨論理の範疇の演繹で必然的に中世の神祕哲學に進まねばならぬものがあるのである。否、カントの辨證法は特に論理の嚴密を以て先驗論理から思辨論理に進展せる上のことであるから、プロチンなどよりもなほ深き思索に進まねばならぬものがあるのであつて、カントの特徴は一者の辨證法的自覺に於て初めて何等

の假定もなき根源的事實の總合を見るのであるけれども、その嚴格なる先驗論理の内面に思辨論理を立て、その辨證法的演繹を明らかにする點に於て徹底せる意味で無限が有限の基礎であることを明らかにするにあると考へられる。實在と思惟の根源についてはカントにはイデアとしての神に溯るのみでなく實存哲學のエクジステンツとしての神の辨證法的自覺に溯るものがある。絶對自我の思想はフイヒテからヘーゲルに至つて益々高調せられて獨逸哲學の特徴をなすところであるが、ヘーゲルのイデアに於て一切の有限が無限に達するといふ中心命題もなほ深く攻究さるべき必然を有するものといはねばならぬ。獨逸の近代哲學でこの絶對者の研究に向つて居るといふことは當然であつて、それだけに獨逸哲學はカントの哲學を深く研究してその根柢を窮める方向に進んで居るといへる。カントを以て體系的認識聯關の統一の先驗的理念の研究に止まるものとする新カント派的解釋に止まるならば總てかくの如きことは見られぬけれども、カントはその論理の根本的要求に基いて總合命題の總合から思辨論理の範疇の辨證法的演繹に進んで居るのであるからこのことは必然的に承認されねばならぬところである。勿論カントに於ては最も明らかに萬人の承認する如く先驗論理の範疇の優れたる演繹論があるのであつて、この點だけでもその批判哲學をして永久に價值あるものたらしめるのである。併し眞實のカントはこれよりも以上に總合命題の總合に於て「心」の全體的直觀の問題を介して思辨論理の範疇の辨證法的演繹論に進んで居るのであつて、その特徴は言

葉には言つて居らぬけれども實際では先驗論理の正確にして精細なる演繹論の比量性を契機として既にもいつた如く直覺性の論理に進んでその先驗演繹を見直す點に於てヘーゲルなどよりも以上に客觀を明らかにすると共に隨つて又主觀を明らかにし、直覺性のアイデアをエクジステンツに於て明らかにする點に於て優れたる辯證法哲學の範を垂れて居るにある。

これ等の點は辯證法としては別に變つたものゝある譯ではないけれども、カントの批判としては從來その演繹論なるものが先驗論理の範疇の先驗演繹論であると考へられて居るだけに重要なものでなければならぬのであつてカントの哲學と現代の實存哲學及び哲學的人間學との深き關係の理解もこれからその手引きを得られるのである。カントは「心」の辯證法的演繹に於て精神を明らかにし、精神の辯證法によつて神を明らかにし、神の辯證法によつて直接何等の假定もなき總合命題の總合を見ると共に、有限を無限によつて規定し、無限その物のエクジステンツを明らかにすべき最善の方法を吾々に教ふる點に於ては眞に古今に優れたる哲學者であるといへる。勿論精神それ自身は只直覺的に見るときはそれ自身で存在せる永遠の眞理の領域であつて、存在者として一切を自己自身の中に有して居る。併し空間に於ける如き關係に於て所有するのではなく、自己自身のものとして所有し、一切のために一切の内在的統一をもつて居る。一切は精神の中に保存せられ、一つに融合すると共に一切に分離して居る。プロチンの精神ともいはるべきものは斯くの如き意味に於て

無有を超越してこれを統一し、非合理性と合理性とを超越してこれを自覺に於て相即聯關するものでなければならぬ。神が自己内直觀に於て第一實體を生じ精神を生ずるといふことはかゝる精神を生ずることではなければならぬのであつて、單にイデアとしての精神を生ずることではなくエクジステンツとしての精神を生じ、その自覺に於てイデアとエクジステンツとを聯關に於てもつ辨證法的矛盾の統一としての精神を生ずることではなければならぬ。只この點に於てのみ精神はその辨證性に於て神の内存在を必然とすると共に、世界として吾々の經驗に於ける主觀客觀の相互關係に於ける認識をも可能ならしめるのである。プロチンの第一實體といふのは斯くの如き精神でなければならぬ。精神は本來イデアであると共にエクジステンツであつて、既にもいつた如くこのエクジステンツの性格を辨證法的に明らかにする點に於てこれまであまり注意せられて居らぬけれどもカントの先驗論理の演繹論は思辨論理の演繹論に轉化せねばならぬ必然に基きその直覺性の論理の眞理の貢獻するところは甚だ多い。有限の眞理は無限その物であるには違ひないけれども、このことを論理的に明らかにするにはエクジステンツとしてのイデアの自己直觀を明らかにし、有限を無限に止揚すると共にこれによつて規定する外ないが、無限その物の規定性を明らかにすることはイデアの先驗論理から思辨論理に轉ずるカントの辨證法が最も優れて居るものと考へられる。精神はそれ自體存在する眞理實在の領域に於ける理論的運動であること、又この運動が無限定の奥底にまで進んで

その統一及び自覺を明らかにすべき思惟であるといふことはこの辨證法的運動に於てのみ理解されることである。精神は理智的に理解されぬ、直覺的に理解されるのみであるには違ひないけれども、この直覺を明らかにしその體驗を深刻にするにはこの辨證法の理智的運動がなければならぬのであつて、この運動のない直覺は哲學にはなれぬ。(次節參照)

主觀は自己の絶對的眞理を媒介として客觀を構成するといふ思辨哲學の眞理もこゝに至つて積極的に認められるのであつて、私はカントの『純粹理性批判』の最も重味のあるところはこの點に於てイデアそれ自身の演繹の概念を徹底すべきことを吾々に教ふるにあると思ふ。勿論カントのイデアの先驗演繹論は主觀的觀念論の先驗的理念の演繹なる點に於て失敗である。併しその正確なる演繹論はその比量性を契機とする直覺性の演繹に於て直接客觀的觀念論の實在及びその絶對的觀念論に於ける規定を積極的に明らかにせねば止まぬのである。勿論このことは繰り返して論ずるやうにカント自身の直接その體系に於て論ずるところではない。併し私のこれまで論じて來たところで十分明らかなる如くカントの哲學に於てはこの解釋を入れねばならぬ必然があるのみでなく、その先驗演繹論に極く僅少の解釋を施すのみで全くその面目を一新せる思辨論理の辨證法的演繹論として最も優れたる哲學を見得るのである。私は何故に哲學界では從來カントに對してこの解釋を加へて來なかつたか疑問に堪へざるところである。勿論これには新カント派の反對影響の多いことゝ信ずる

が、その新カント派は總合命題の總合に於ては是非其比量性の論理に對して直覺性の論理を承認し、體系的認識の總合的統一の先驗的理念に對して思辨論理の直覺的理念の辨證法的演繹を承認せねばならぬ論理的必然を有するのであるから、私は私の以上の解釋を以て新カント派から見ても反對を受ける理由はないと思ふ。

私はこの點については後にカントのイデアの演繹について機會を作つて十分に論じ、この點に於ける私の意見をイデアの演繹論の方面からも十分確めて置きたいと思ふのであるが、只今の小論文に於てはそれまでに深入りすることは却つて事件を不必要に複雑にするから控へて置かねばならぬ。思辨論理の眞理に於て精神が辨證法的發展の自覺でなければならぬ限り、その絶對性に於ては客觀の獨立は主觀の自覺的自己肯定にならねばならぬのであつて、客觀の内在的合理性は主觀それ自身の法則の自覺である。神の自己内直覺に於て精神それ自體が興へられ、客觀それ自體は獨立的起原の絶對として非合理性であると共に内在的合理性の存在それ自體であるべき法則を精神から興へられるのであつて、精神は絶對自覺として只單に自己自身に對する關係に於て絶對的實在を概念的立言の對象とするのである。客觀的實在が非合理性の絶對であるに拘らず、その非合理性たるの絶對性に於て内在的合理性をもたねばならぬといふこと、然もこの内在的合理性は無限的認識の客觀的方面をしか示すものでないといふこと、隨つて無限的自我の絶對認識にはカントの物自體的對

象認識の原則以上に改めて主観的方面に於て原則の吟味がなければならぬといふことはこの客觀から主觀に歸つて主觀客觀の關係を精神の絶對自覺に於て解決すべしといふことであつて、こゝに吾々はカントによつてイデアとエクジステンツとの關係を明らかし、イデアに於て有限の無限的眞理を發見するのみでなく、有限その物が眞理それ自體であることを知るのである。一切の思辨哲學の中心問題を積極的に解決するといへる。カントはこの點でヘーゲルよりも優れて居る。

普通の見解によるときはカントの批判に於ては勿論眞理の卽自的實在を承認せぬ。又この眞理の絶對的確實性の客觀的契機を否定する。總てが先驗統覺の先天的眞理をもつて一貫されたるものとする。その限りに於ては主觀と客觀との獨立契機を確守する思辨哲學とカントの批判哲學とは正に反對の敵役となつて居る。併しカントも思辨哲學と同様にこの客觀的契機の獨立を承認せねばならぬ必然の論理を以て進んで居るのであつて、カントより既に述べた如くヘルバルトへといふことは必然であると共に、カントはこれを契機として絶對觀念論の立場に進んで絶對自我の構成を明らかにするのである。これ等の點は『純粹理性批判』から『實踐理性批判』に進んで見るときは最も明瞭なるところであつて、カントの特質はこの後の批判に於て自我が自我を自覺すると共に一切の存在を自己自身の中に包攝してこれと相即聯關あるものとする點で神の有限に對する規定を明らかにし、有限その物が無限の眞理それ自體であることを明らかにするにある。「私は私である」といふ命題は

カントの一切の總合命題の根本的命題であつて、カントは吾々自身の個人的生活の中に於て神その物の認識を明らかにする點に於て無限の有限的存在を明らかにし、吾々人間の悟性の感性的限定及びその總合を明らかにする點に於て神の認識を明らかにし、吾々人間の認識が最も根本的且つ具體的に神の絶對媒介による絶對眞理その物の構成であることを明らかにすべきを吾々に示すものであるといへる。

一體吾々の經驗に於て或る物が眞理であるといふことはそれが有限の眞理であると無限の眞理であるかを問はず、カントの思辨から見るときはイデアであると共にエクジステンツである點に於ていはれることであつて、カントの最も大なる特徴はその批判に於て科學的存在のイデアを明らかにすると共に、これを思辨論理の範疇に止揚してそのエクジステンツを明らかにすることである。カントの批判哲學に於ける科學的存在のイデアについては私は今こゝで論ずる必要はない。既に論じ古されたる問題である。科學的認識の先驗的理念を思辨論理の理念に止揚したる場合の總合命題の總合が私のこの論文の出發點となつて居ることは既に詳しく論じたところであるが、この立場から見るときは勿論カントに於てもプロチンなどと同じやうに神が一切の根源的事實の根源である點に於て絶對であるけれども、プロチンと異なつてカントはこの絶對の辨證法を明らかにしてその存在論的規定を明瞭にするにある。少くともこれを明瞭にすべき眞理の必然とその探究の方法とを明示

せるにあるといへる。總合命題の總合に於て比量性の範疇から直覺性の範疇に進み、「心」の辨證法的演繹の根源を開拓したカントの影響は非常に大きいのであつて、私はカントがニュウトンの物理學の基礎附けに出發してこの神の絶對的なるエクジステンツに於ける眞理を發見すべき途を開けるのみでなく、『實踐理性批判』でその事業を成果せしめて居る功績に至つては眞に古今無雙であると思ふ。勿論この點に於ては客觀的實在としてのエクジステンツの性格を闡明にする點でカントの哲學が先驗的思辨的に特異の功績をもつて居るのに由ること多きを知らねばならぬこと斷るまでもない。プロチンが認識するものとしての實在とせられるものとしての實在及びこの兩者の關係を自己に統一し自覺せるものとしての實在を分つたが、絶對自覺の精神に於てはこの兩者の關係を直接エクジステンツに於て規定せねばならぬのである。總ての意味に於て有限の眞理としての無限のアイデアをエクジステンツに於て規定するのである。總ての有限がアイデアに於て無限の眞理に達するのみならず、無限が有限その物として存在するといふことはこのエクジステンツに於ていはれるのである。無限は有限その物に於て對自的に自己否定の客觀的實在を肯定し、而してその非合理性をも內在的合理性に於て見る理性的内觀を表現するといふことは既に述べたが、この表現は單なる自覺ではなく、一切を自己自身の中に有し一切のために一切の統一を作る自己をエクジステンツとして直接自覺するのである。一切の有限がアイデアに於て無限の眞理に達すると共にこのアイデアをエクジ

テンツに於て見るのが神であつて、神に於て初めて一切の有限が無限の眞理に達する以上に無限の眞理その物が有限の存在を自ら自體であることを知るのである。神の自己規定に於て實在を有する思惟が見られるのである。神それ自身が一切の根源である自己を自覺し、その限りに於て一切を自己自身の中に含みてこれを自己自身と相即して自覺する點に於て一切が神の中に存在し、神の直接的規定の下に存在する無限となるのである。

たゞ精神に於て主觀と客觀との兩者が根源的に統一せられたる全一的根據を見るといつても、この根據はなほ抽象されたる主觀と客觀との根據であつて、直接的事實の根據でないから吾々はなほこの根據の事實に溯つて總合を見ねばならぬ。然らざる限り眞の哲學は見られぬといふの外ない。總合命題の總合に於て眞の總合判斷を見るカントの企圖は精神のエクジステンツの觀察に止まる限りなほ實は達せられて居らぬのであつて、この總合はこの根源的事實の總合でなければ見られぬ。これが「心」の自覺としての精神でなく精神の絶對自覺としての神に於て一切の總合問題を解決し、随つて又原則を見ねばならぬ所以である。感性的多様と悟性概念との比量的統一に比較するとき主觀と客觀との統一は前者の比量性を契機とする直覺性の範疇の辨證法的演繹に係るものであるから具體的本質的であるといへるには違ひないけれども、なほ抽象されたる主觀と客觀との統一的根據を見るに止まるのであつて、根源的事實として何等の假定もない直接的總合ではないのである。

故に吾々はこの總合の根源に溯つて神それ自身の思辨論理の範疇としての辨證法的演繹を明らかにし、然もイデアならぬエクジテンツに於ける積極的真理に於て明らかにせねばならぬ。認識に於て吾々は神をプロチン以上に見ねばならぬ理由はこゝにあるのであつて、カントに於てもプロチンと同じやうに神こそは根源的事實の根源としてこれに絶對的起原を與へるものであるから、眞に一切の意味に於て絶對的絶對無であるけれども、精神に於てと同じやうにこの無の矛盾性に於て絶對的絶對有を認め、その非合理性と合理性との相即聯關に於て眞に一切の認識の永久の根據を見ねばならぬ論理の必然がある。昔、エクハルトは神に於ては意欲もなく愛もなく善もない。神は一切の範疇を超越し端的に超概念的であり隨つてその限りに於て「無」であると考へたが、この思想はなほ神の一面たるイデアを見てその他面にして然も根本的なるエクジステンツを見るものではない。神はそれ自體何等の意味に於ても規定されない非合理性のものであるからその自己否定に於て合理性の根源的事實を肯定すると共に、又その否定に於て自己自身の非合理性を自覺し、非合理性と合理性とを絶對無上の意味に於て相即聯關せるものとす。隨つて又その限りに於て神は自己の無を自覺すると共にその自覺に於て根源的事實の有を含み、無有を超越せる絶對として絶對的な無のエクジステンツをもつのであつて、こゝに初めて總ての意味に於て徹底せる根源的事實の根源としての神の辨證法的發展に於て一切を根源的に理解し得られる。神の自己認識に於ては世界をその永遠の本

質に於て認識するのであるけれども、これはその個別的存在を抽象せる一般的形像に於てするといふことではなく、個別的存在その物の本質に於てはあつて、こゝに有限の存在を無限の真理その物たらしめるのである。ヘーゲルの如く有限がイデアに達する以上にイデアその物をエクジステンツに於て規定するのである。カントの總合命題の總合は必然的にこゝに達せしめるのであつて、神を以てエクハルトやプロチンの如く只絶對無に於て見らるべきものであるといふのはなほその根柢に比量性の抽象的觀察を殘すものであるを免れぬ。随つてその限り嚴格にはなほ神その物を見ぬといはねばならぬ。一體比量性の認識では規定されたるものに溯り得るに止まるのみであつて、それ以上規定されない絶對といふ如きものの概念を明らかにすることは出來ぬけれども、比量性その物は既に述べた如く直覺的認識の契機となる點に於て規定されたるものを規定されないものの規定として見るのみでなく、この比量性で規定されないものを直接的に規定して往くのである。比量的認識に於ては先驗的理念を肯定し得てもその理念なるものが常に經驗の特殊に對する一般的理念たるに止まり、理念その物を規定する點に於てこの特殊を無限の真理として見る存在論的原理を得ることとは不可能であるけれども、直覺的認識に於てはこの規定を明らかにし經驗の特殊を絶對的真理その物として見ることは出来る。この認識は真理その物から出發し、然も同有の充實性に於て出發し、それ自身その即自體に於ては未だ何等の形態もなき絶對的真理のイデアを一定の形態を有せる

眞理となし、それ自體に於て何等の限界もなき無限の思惟といふの外なき眞理その物が一定の形態を有せる具體的思惟の原理であると共に存在原理となり、特殊の存在を絶對的眞理その物に於て見ることを得るのである。

こゝに於て私は本節の初めに述べたカントの絶對自我の自己否定的方面に於て見らるべき客觀肯定の原則がこれを思惟の契機とする絶對自我の自覺的思惟に於て新らしき原則に轉廻せねばならぬといった事柄の理由及びこれに轉廻せられた場合の原則概念は明らかになると思ふ。勿論辨證法的でなければならぬのであるから、精神に於ても神に於てもその自己矛盾の辨證法的性質が理知的運動の發展と自覺とを生ずるのであつて、この自覺に於てそのイデアがエクジステンツとなり、イデアとエクジステンツとが相即聯關に於てある自覺に演繹の根源が見られるのである。随つてその限りに於て演繹の最高原理となり得るのである。或は精神は兎に角神がその自覺に於てなければこの原理となり得ぬといへば不可思議に考へ、神の概念的規定に於て原則を發見せんとする如きことは神の絶對性を害するものであるといふかも知れぬ。併し只イデアとして見たる神は有限を無限に歸し得ても、神それ自體が有限の原因であることを明らかにし得ぬのであつて、吾々は只この神のエクジステンツに於てのみ神が一切の有限の内在的原理としてこれを無限の眞理その物たらしめることを知りを得るのみである。永遠の眞理の世界に於ては一切の存在が一切の眞理に於て理性的秩序

を保つて居るといふことはこゝにいはれるのであつて、總合命題の總合といふことは只この神の自己媒介による對立者の總合に於て最後の意味で見られ一切の原則の根源となり得る。最高原則は只この神のエクジステンツに於てイデアと相即聯關せる點に求められ又求められねばならぬのみである。神を只イデアに於て見るのみでは不十分である。イデアに於ては一切の有限が無限の眞理に達するといふことを知るのみであつて、無限その物が有限その物に存在する規定原理であることは判らぬ。このイデアをエクジステンツに止揚しイデアの自己否定的要素がエクジステンツに於て自覺せられて直接その規定を受けることを明らかにせぬときは無限その物が有限それ自體に内在する總合原理であることは明らかとならぬ。隨つて神が第一實體の根源であり、精神その物の根源であるといふだけでは最高原則の本質は明らかとならぬ。神それ自體のエクジステンツに於て第一實體を見、その辨證法的なる自覺を明らかにするのでなければこの原則は判らぬ。即ち神それ自身が一度自己否定を通して絶對肯定に歸り、その限りに於てその非合理性を合理性に於て見、神それ自體に於てこの兩者が相即せられたる理性的秩序を神それ自身の自覺に於て見ぬ以上は吾々は論理的に總合判斷の最高原則を積極的に明らかにすることが出來ぬのである。

比量性の範疇の先驗演繹に於て感性と悟性との統一を論ずるといふ如きことは全く抽象的事柄を抽象的に論ずるものであることは勿論、物自體とこれに對應する自我との總合を論ずるといふこと

もなほ抽象的であるを免れぬ。眞の具體的なる總合はかゝる物自體的客觀と主觀との根源たる根源的事實に係るものでなければならぬけれども、この事實をイデアとして見るのみではなほ有限を無限に歸着し得ても無限が有限その物の眞理であることを明らかにすることは出來ぬ。このためにはイデアをエクジステンツに於て見、エクジステンツに於てこの兩者の聯關を明らかにせねばならぬ。神の自己認識が一切の有限の最高の眞理の根源であるといふことはこのエクジステンツに於けるイデアとエクジステンツその物との相即聯關の自覺に於ていはるべきことであつて、こゝに吾々は無限その物が一切の眞理の根據となり得るのを見るのである。總合判斷の最高原則は絶對精神即ち神の辨證法的自覺に於て見らる對立者の總合に於て求めらるべきものである。

私は前節の論文に於て物自體を總合的規定に於てもつ自覺的知識實在の存在構造を明かにする思辨論理學の範疇の辨證法的演繹もなほ抽象的であつて、生命その物の根據に溯れる神の辨證法でないといふ述べた理由はこゝに至つて明らかであると思ふ。辨證法は神の辨證法である。勿論神の自己否定に於てはその客觀的事實としての根源的事實のエクジステンツを見、隨つてイデアとしての神の非合理性を內在的合理性のエクジステンツに於て見るのであるが、この對立者の總合を辨證法的に自覺するとき一切の根源的總合の理性的秩序に於ける明證がある。若し明證の概念が哲學的に自明の概念であるならば、この根源的直接的眞理としての眞理の自覺に於ていはるべきことではなければ

ならぬ。真理の即自的實在がなければならぬと共にこれを總合的主觀に對する實在とせねばならぬのみならず、この主觀が思辨論理學の主觀として必らず內在的總合の主觀でなければならぬといふことはこの根源的事實によつて直接的に媒介せられる絶對真理の辨證法的自覺に於ていはれること
でなければならぬのであつて、カントの批判に於て經驗の制約が同時に經驗の對象の制約であるといふ原則はこの事實が無限の真理その物であるといふ直接經驗に於ていはるべきことでなければならぬ。又對象は總合的統一の必然的制約の下に立つといふ原則もこの直接經驗に於ける理性的秩序の統一に於ていふことでなければならぬ。カントの『先驗分析論』に於ける原則は總合命題の客觀的妥當をいふのみであつて、最高の總合その物の本質をいふものでないといふ批評は從來カントの原則批判に於て一般に見るところであつて、私が前節に於てカントの『先驗分析論』に於ける原則を以て客觀的實在の內在的合理性を示せるものに過ぎぬといつたのも廣い意味ではこの一般的批判の範圍に於けるものと見ることが出来るかも知らぬ。併し私を以て見るときはカントのこの內在的合理性の原則は思辨論理の自己否定的方面の原則であるだけに直接必然的に自己肯定の絶對自我に於ける絶對自覺の原則に止揚せねばならぬ。從來この見解を有せる學者はないではない。例へばハルトマンが原則を以て觀念論と實在論とを超越せる立場に於て考へねばならぬとする見解を取つたのはこれである。併し只この兩者を超越せる立場に於て考へねばならぬといふのみではなほこの統一

をイデアに於て見るのみであつて、エクジステンツに於て見るものでないから、私の以上詳しく批判したやうに未だ眞の總合命題の總合を見るものでもなければ又この總合に於て有限その物が無限の眞理それ自體であるといふことを明らかにするものでもなく、随つて折角根源的事實に溯りながらその總合概念を明らかにするものとはいへぬ。ヘーゲルがイデアに於て一切の有限が無限の眞理に達すると考へるのも原則から見るときはこの缺點を有するものであつて、眞の原則概念を把握せるものではないといはねばならぬ。原則としてはこのイデアに對するエクジステンツを見、この兩者の聯關に於て無限が有限の眞理その物であることを明らかにする場合でなければ明瞭に規定されぬ。現象學に於て志向的内在又は内在的實在若しくは内在的總合といふことが重要視せられて居るけれども、それが只直覺に於て見らるべきイデアの觀察に止まる限りはその期待する如き眞理を有せるものではないのであつて、吾々はこのイデアをエクジステンツに於て見、それに於てこの兩者の聯關を明らかにする自覺に於てのみ所謂志向性の内在的實在又は總合を明らかにし、經驗の本質及びその内在的總合を明らかにして吾々自身の有限の感性的經驗その物が無限の眞理それ自體の構成であることを知り、悟性の圖式的限定の總合が神それ自體の自己認識に基く絶對經驗であり得ることを知るのである。吾々自身の總合の最高原則は神それ自身の辨證法的自己認識に基くのである。

さて私は以上初めから述べたところによつてカントが總合命題の總合によつて先驗論理の範疇を思辨論理の範疇に止揚せる以上は、客觀的實在の世界を承認すると共にこれを契機として思惟する絶對自我の辨證法的自覺に於て見る自己媒介の總合の外に眞の先天總合はなく、隨つて原則はない點について論じ、結局カントの總合の最高原則は神の辨證法的自覺に求めねばならぬ點について論じた。この辨證法に於ける存在論は現代の實存哲學及び哲學的人間學と如何なる關係をなせるものであらうか。私の考へを以てするときは現代のこの二つの哲學は實存的人間學として統一さるべきものであり又統一されて居ると共に、カントの以上述べた思辨論理の總合の概念は必然的にこゝに達すべきものである。隨つてその總合及び原則もこの實存的人間學的哲學の總合及び原則でなければならぬのであつて、この點を明らかにするとき初めて眞理の探究に於てカントはイデアに於てではなくエクジステンツに於て無限の有限的存在を規定すべき神の辨證法的自覺に於ける總合及び原則の概念を具體的に明らかにすることが出来るのである。次にこの二つの點について論じてこの小論文を終へることにしようと思ふ。

(未完)